

■追悼文

富增多喜夫先生を偲んで



電子技術総合研究所最近の十年史（1991年発行）より転載

富增多喜夫先生には、病氣療養中のところ平成26年7月11日に82歳でご逝去されました。ご逝去の報は、先生が長く研究生活を送られた電子技術総合研究所(電総研、組織再編により産業技術総合研究所：産総研)で共に仕事をさせて頂いた私どもにも届くことはありませんでした。後に産総研のOB会事務局に奥様よりご連絡を頂いた事でその事実を知ることとなり、かつてご指導頂きました親しく接して頂いた数名で後日ご自宅にお悔やみに伺った次第でした。その様な訳で大変遅くなりましたが、ここに先生のご経歴、ご業績やお人柄の一端をご紹介します。追悼の言葉に代えさせて頂きたいと思います。

先生は1956年京都大学理学部物理学科を卒業され、同年通商産業省工業技術院電気試験所(後の電総研、現在の産総研)に入所されました。当初高エネルギーX線の計測技術の研究に従事され、1964～1965年にかけてカナダのサスカッチワン大学加速器研究所で高エネルギーX線標準の研究を行われました。帰国後は電総研量子技術部放射能研究室長、同部高エネルギー放射線研究室長、量子技術部長、量子放射部長を歴任されましたが、この間、電総研のつくば移転に合わせて400 MeVの電子リニアックTELLと600 MeV(後に800 MeVに増強)の小型蓄積リングTERASを開発し、1981年に放射光発生に成功されました。その後、先生の指導のもと1980年代半ばか

ら1990年代初頭にかけて、住友電工との協力により小型リングNIJI-I～IIIが、また川崎重工との協力により自由電子レーザー(FEL)専用リングNIJI-IVが建設されました。これと並行して基盤技術研究促進センター(当時)と民間企業13社の出資により設立された株式会社SORTECの1 GeV放射光施設の建設も指導されるなど、我が国における小型放射光源開発をけん引されました。一連の蓄積リング建設の後1991年に電総研を辞され、リニアックを用いたFELの実用化を目指して、株式会社自由電子レーザー研究所(現、大阪大学自由電子レーザー研究施設)所長・理事に就任。約6年間でFEL施設を建設し、赤外から紫外域に至るFEL発振の成功とFEL利用技術開発に、その手腕をいかに発揮されました。先生の加速器建設への情熱は留まるところを知らず、2002年には佐賀県の放射光利用施設開発に招かれ、3年間という短期間で1.4 GeVの放射光源(SAGA-LS)を作り上げられました。SAGA-LSは現在多くのユーザーに利用され、成果を上げ続けています。これらの業績に対して、通産大臣賞、科学技術庁長官賞、紫綬褒章、瑞宝小綬章など数々の栄誉を受けられています。

放射線計測がご専門であった先生が最初に加速器開発に関わられたのは、動作しなかった小型ベータトロンを稼働させるように上司から指示され、これに成功したことがきっかけであったと伺いました。筆者は蓄積リングTERASとNIJI-IVを用いたFEL発振の研究をさせて頂きましたが、NIJI-IVの放射線遮蔽ブロックの上に、何故か古い小型のベータトロンが長い間置かれていました。後に先生が“自分が電総研でかかわった最初と最後の加速器を並べて置いたんだよ”と楽しげにおっしゃっていたことを思い出します。先生は生涯大好きな研究に没頭し、充実した人生を送られたのだらうと思います。旅立たれる1か月前の誕生日に入院中の病院で撮られたお写真を拝見しましたが、満足そうにほほ笑んでおられるように感じました。ご冥福をお祈りいたします。

山田 家和勝(産業技術総合研究所)